

東シナ海ブロック水産業情報

No. 110(2020年7月～9月)

増養殖情報

山口県	福岡県	佐賀県	長崎県	熊本県
<p>○2年連続シロアマダイの種苗生産成功 瀬戸内海産シロアマダイの親魚を用いて、(公社)山口県栽培漁業公社と共同で種苗生産に取り組み、40mm種苗、約4万尾の生産に成功した。(7月)</p>	<p>○有明海 【アサリ】 移植放流 ・7/15～19(5日間)、高密度に発生した漁場から稚貝177トンを探捕し、底質が良く生息密度が低い他漁場へ移植。 移植した稚貝の平均殻長は約15mm(R1年秋生まれ)。 ・7月下旬～8月上旬にかけ、昨年12月に設置したバーム椰子袋 約4,200袋を回収し、干潟漁場へ移植。 ○豊前海 【カキ養殖】 ・全体的に食害は平年より少なく、成長は順調に推移も、9月以降への死亡率がやや高め。 【栽培関連】 ・「かぐや装置」によるアサリ稚貝生産、網袋による干潟での放流試験を実施中。 ・クルマエビの直放、ガザミ、ヨシエビの直放や中間育成→放流を実施。</p>	<p>○有明 ・マガキ養殖: 令和2年度の生産は、令和元年(2019年)11月に宮城県から種カキを264,530枚搬入し開始している。搬入された種カキは、大浦地先の干潟で5月現在まで抑制飼育を行い、養殖筏への種カキの垂下は、4月中旬から順次行われ本養殖を開始している。 昨年度カキの大量斃死を誘発したシロボヤの付着が7月3日時点で見られ始めていたが、7月6日以降の豪雨にともなう低塩分によって、その大部分が脱落した。しかしながら、養殖カキについても2～3割程度の斃死が見られ始め、その後も斃死は継続し、9月末時点で表層から中層の養殖カキの大部分が斃死した。 ○玄海 ・カサゴ: 6月上旬から8月上旬に全長50～60mmを3.5千尾配布済。 6月下旬から7月上旬に全長60～70mmを5万尾配布済。 ・クロアワビ: 平成30年度産:4月下旬に放流用約3千個(30mmサイズ)を配布済。 令和元年度産:殻長13～30mm約2.6万個飼育中。 ・ナマコ: アオナマコは6月中旬から8月上旬に76.0万個配布済。 アカナマコは7月上旬から8月上旬に36.4万個配布済。 ・マサバ: 60mmサイズ約3.3万尾を唐津市へ引渡完了。</p>		<p>【7月】 マダイでベネデニア症、トラフグでヘテロツリウム症発生。 【8月】 マダイでエドワジエラ症、トラフグでヘテロツリウム症が発生。 【9月】 マダイでエドワジエラ症、シマアジでレンサ球菌症が発生。</p>

鹿児島県	宮崎県	大分県	沖縄県
<p>・スジアラ種苗生産:約1千尾を生産。</p>	<p>II型α溶血性レンサ球菌症市販ワクチンを養殖現場で接種済みのカンパチに対して同ワクチンを再接種し、当該疾病抑制効果を実施中。 4月に県北養殖場より導入したカンパチ供試魚(R1年8月3日ワクチン接種済)群を「1回接種区」、同群一部に再接種(R2年5月18日)した群を「2回接種区」として、II型レンサ球菌感染実験(①8/10～7/1、②8/26～9/14)を行い、ワクチン1回接種の効果の持続性と再接種の効果を検討した(12月まで感染実験③を予定)。初回接種から10カ月経過の「1回接種区」は10尾中8尾死亡で効果は認められず、一方、2回目接種から1カ月経過の「2回接種区」に死亡はなく、効果が認められた。感染事件②では①と同様「1回接種区」は10尾中9尾死亡、「2回接種区」は同1尾死亡で「2回接種区」で効果が認められた。ワクチン1回接種では10カ月まで効果が持続しないこと、再接種することで改めて防御能を得られることがわかった。</p>		